

子どもと子どもが主体的につながる授業実践 対話から「深い学び」へ

高度学校教育実践専攻

教員養成特別コース

津本 樹

キーワード：対話、主体的な学び、深い学び

実習責任教員 川 上 綾 子

実習指導教員 江 川 克 弘

1. はじめに

筆者の考える理想の授業は「子どもと子どもが主体的につながる授業」である。「子どもと子どもが主体的につながる授業」とは、学習内容に対して自分の考えを持つことができ、それを他の人に伝えたい、あるいは友達の意見をを知りたいと思う感情がうまれる授業である。そして伝えたい、知りたいという感情がうまれることで、自然と子ども同士の対話が成立し、意見交換を行うことで子ども同士に知的なつながりができると考える。

しかし、筆者の授業における課題は教師主体の知識伝達型授業になることであり、理想の授業とは程遠いのが現状である。

そこで筆者は、「子どもと子どもが主体的につながる授業」を目指し、実践課題の中心に対話を据えることにした。

2. 授業実践研究

ここからは、対話的授業を意識し、設計を行った授業の実践と省察を通して、明らかになった成果と課題について述べる。

(1)基礎インターンシップ

鳴門教育大学附属小学校第 4 学年道徳科
「勇気のかんづめ」(2017. 11. 16)

(i)成果と課題

成果として、子どもの関心を引き寄せる導入を行えたことが挙げられる。ワークシート

や授業後のノートなどに目を通すと、子どもが意欲的に授業に取り組んでくれたことや関心を寄せてくれていることが分かった。一方、課題としては次のようなものがあった。

① 教師の手のひら授業

筆者は自分の想定どおりに授業を進めようとしており、児童の呟きや発言を生かした授業が行えていない。児童の発言で「かんづめの中に勇気なんて入っているわけがない」

「ものに頼らないことが大切」というものがあったが、筆者は物語の読み取りを優先してしまった。本時のねらいを達成させるためには、「何故かんづめの中に勇気が入っていないと思うのか」「ものに頼り、簡単に手に入る方が楽ではないか」など児童の発言を深めていく必要があった。しかし筆者は自分の想定外の方向に授業が進んでしまうことを恐れ、児童の発言を広げることができなかった。

②ポイントが分からない授業

授業の半ば、「あなたなら勇気のかんづめを買うかどうか」という発問をした。買う側の意見として「買うことに勇気が必要である。信じないと買えないのだから」、買わない側として「それは本当の勇気ではない」「自分の勇気ではなく、人工的な勇気である」という議論が起こったが、私は先に進んでしまった。授業を進めることに必死になり、「物語と自分自身を照らし合わせて考える」というポイ

ントを見逃してしまった。また、そのことをポイントと言いながら強く意識して授業に取り組んでいなかった。その為、子どもの学びを一つ潰してしまったのである。

② 子ども同士の繋がりが無い授業

本授業は教師の発話が多く、児童がゆっくりと思考できる時間が少なかった。自由に発言させることで様々な考えに触れ合えるようにしたが、発表者に偏りが見られ、競争的な話し合いになってしまった。また、「勇気とは何か」の発問に9人の児童が発表してくれたが、児童の考えを板書するだけに留まっており、児童の考えを広げることができなかった。発言者に偏りができたのも、児童の考えを吟味し、考える材料(勇気の定義)を広げられなかったために、全員が考えを持って授業に取り組めていなかったことが原因として考えられる。

(2)総合インターンシップ I

M小学校第4学年算数科「何倍でしょう(1/2)」(2018. 5. 28)

(i)授業の概要

本実践では、基礎インターンシップ時の課題を基に、対話的活動を取り入れ、子どもたちの主体的学びを促そうと考え、以下の手立てを行った。

①問題をテープ図や関係図にまとめることで、数量間の関係を視覚的にとらえさせ課題に対する理解を深め、問題に意欲的に取りくめるようにする。

②ヒントカードを活用し、解決の見通しが立てられない子どもが糸口をつかめるようにしたり、答えられた子どもには1通りの考えに留まらず、他の考え方に意欲的に取り組み

るようにすることで、退屈する子どもがでないようにする。

③上記の手立てを通して子ども一人一人が自分の考えを持てるようにし、ペアワークやホワイトボードを用いた発表などで、自分の意見を伝えたり、異なる意見を知ることの楽しさに気付けるようにする。

(ii)成果と課題

本実践では下記のような成果が見られた。

①多くの子どもが発表することができた。

本時では21名中17名が考えを発表することができた。また、導入時から意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

②授業中に対話的な吹きが見られた。

Aさんが後ろに座っているBさんに対して「この解き方どうかな?」と声をかけ、自分の考えた解き方の説明をしていた。教師が意図的に環境を設定したのではなく、子どもが自然と自発的に対話を始めたのである。また、全体での友達の発表に対して「ねえこれってこういうこと?」「そういうことか」「この解き方は凄いなあ」「そのやり方、説明したい」などの吹きが見られた。これは友達の考えに関心を持ち、自分の考えを構築している証と言えるだろう。

一方、下記のような課題が明らかになった。

① 深い学びに対する認識不足

主体的・対話的で深い学びに関して、本授業と照らし合わせて検討したところ、「主体的な学び」「対話的な学び」については、本授業を通して認識することができた。しかし「深い学び」に関しては筆者が具体的なイメージを掴めずにいることが明らかになった。

筆者の授業設計は活動への関与に留まっており、認知プロセスの外化を意識していな

かったことが原因として考えられる。すなわち本時の活動において深い学びを促す手立てが無かったために浅い学びに終決してしまったのである。

② 教師の発話量の多さ

プロトコルを分析すると、教師の発話が多く長いことに気付いた。発言回数は子どもの方が多いが、子どもの意見を復唱したり、説明が長いことが多い。そのため、教師の発話の度に授業の流れが止まってしまい、間延びした時間となってしまった。

対話的授業を行うには多くの時間を要するため、限られた時間を有効活用する必要がある。発問をコンパクト化し、活動に多くの時間を設けられるようにする必要がある。

(3)総合インターンシップⅡ

M小学校第4学年道徳科「全校遠足とカフェ」(2018. 11. 15)

(i)授業の概要

総合インターンシップ1の課題を踏まえ、図1のような深い学びへとつながるプロセスを構想した。本実践ではこの図に基づき、対話的活動を通して、深い学びを目指し、授業を行った。

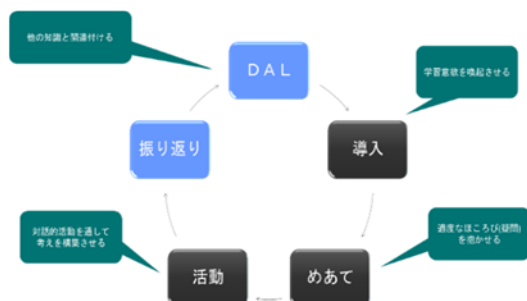


図1 主体的・対話的で深い学びへとつながるプロセス

(ii)成果と課題

本授業を2つの視点で分析を行い、成果と課題を明らかにした。

① S・T授業分析

授業中の子どもと教師の行動関係を分析するS・T授業分析法(吉本・藤田 1980)を用いて、翻字の分析を行った。

ア) 授業開始から20分頃までの課題と成果

○成果：復唱が減少し、導入時に子どもたちが多く発言することができた。子どもたちの考えからめあてに結びつけることができた。

○課題：導入が長く、結果的に授業時の振り返り時間が減少してしまったこと。

○解決策：子どもの発言に対するレスポンスをもっと減らし、コンパクト化する。

イ) 20分頃から授業終了までの課題と成果

○成果：教師の働きかけが少なく、子どもの行動回数が多く見られた。

○課題：子どもの発言に対する反応が浅く、発言を広げたり、深める活動がなかった。

○解決策：発言に対する問い返しを行い、さらに深く思考できるようにする。

②主体的・対話的で深い学びへとつながるプロセス

ア) 導入

学習環境を整えることは、集中して学習に取り組む上で重要である。そこで筆者は授業開始後、すぐ机の上を整頓するよう声掛けを行った。また本時は道徳科であり、物語を扱う。子どもたちは読み物を見ると、それを読むことに没頭することがあるため、教科書は開けさせず、プリントを使って授業を行った。

本学級には、授業態度や話を聴く姿勢が望ましいとは言えず、指導を受けることが多い子どもがいる。しかし、本時ではそのような

指導を必要とする場面は見受けられなかった。本授業は筆者の研究授業と言うことで、参観に来た大学教員が後方に並んでいたこともあり、子どもたちにとっては特殊な環境下での授業であったに違いない。その為、緊張感を持って授業に取り組めたことが要因として考えられる。ただ主観的判断とはなるが、机周りの環境を整えたことも、子どもたちの授業に対する心構えなどに影響を及ぼしたのではないかと考える。

イ) めあて

子どもの思考の流れに沿って、子どもたちの疑問からめあてを導き出すことを意識した。実際に導入段階で、一部の子どもたちに「どうしたらいいのだろう」と疑問を持たせることができた。しかし、発言したのは一部の子どもだけであり、全体がそう感じたかどうかは定かではない。それらを把握するためのデータを取っていないため、その点についての分析は困難であった。

ウ) 活動

考えを共有する活動としてはペアワークを活用した。ペアワーク後の発問では多くの子どもが挙手し、発表ができたことから、考えを整理したり、自信を持てるようにするという意味では、ペアワークは有効であったと考える。しかし、ペアワークの内容を聞いてみると、話し合いは行えていたが、主張や言い換えに留まっており、深まりのある話し合いとは言えなかった。また、子どもの発表に対して、筆者が考えを深める問い返しを行えていなかったことから、本授業における活動は上手く機能していたとは言えない。

エ) 振り返り

ワークシートにて振り返りを行った。中に

は数名、実体験を交えて、具体的な行動を記述している子どもがいたが、ほとんどの子どもは物語に関する感想になっていた。

ワークシートに関する指示では、筆者は子どもたちが授業で感じたことをありのままに記述できるよう「感想を書きましょう」と抽象的にしか説明しなかった。しかし、振り返りでは物語を通して深めたことを自分事として考えることが深い学びに繋げていく上で重要であると考え。振り返りでは、自由な記述より、書くべき内容の範囲を指定し、自分事として考えを深めていけるように促すことが重要であると気付いた。

オ) DAL(深い学び)

ここでのDAL(深い学び)とは現実場面ではどう行動できるかである。本時であれば「正しいと分かっているながらも、できなかったとき」に直面したとき、正しい判断を行うことができたか、また、誤った判断を行ったとしても、それに気づき、次の行動に繋げていくことができるかということである。しかし、本授業の様子だけで判断することは困難であり、長い目で子どもを見守る必要がある。

3. 今後に向けて

総合インターンシップⅡでは、4つの視点に基づき、授業の検討を行った。すると主に③活動と④振り返りに筆者の課題があることが明らかになった。筆者には子どもの考えを深めていく問い返しスキルと子どもが自分事として学びを捉えられる振り返りスキルが欠けているのである。本授業で明らかになった筆者の課題である③活動④振り返りをさらに具体的にし、意識して授業に取り組むことで、より良い授業ができると考える。